

自転車とドーピングの関係 Relation between bicycle and doping

1K06A167-9

續谷 利次

指導教員 主査太田 章先生

副査 村岡 功 先生

【緒言】

ロードレース界においてドーピング問題は深刻である。始めてこの問題に触れたのは、高校時代に参加したジュニアワールドカップであった。日本では考えられないくらいのドーピング検査の回数、そして意識の差。当時の国内での大会においてドーピング検査は全日本選手権においての一回のみであった。この時始めて私はこの問題に疑問を持ち始め、なぜこの問題がなくなるのかを研究するにいたった。

本研究は自転車競技やドーピングなどの参考資料、関連文献を基に、ドーピングの根本から振り返り、発展した背景やロードレース界の現状を基に、どのようにドーピングと付き合っていくべきなのかを考察し、解決に向けての提案をしていく。

【ドーピングの定義と歴史】

薬剤の「**drug**」と南アフリカで飲まれていた「**dope**」から生まれた言葉である。その後。アンフェタミンやタンパク質同化ステロイド、血液ドーピングなどの方法が生まれる。この中には戦争などで利用されていた薬をスポーツに転用されている。今章はさまざまな資料、文献からドーピングの根源やの歴史的背景など詳しくまとめる。そもそもドーピング語源はドーピング技術や薬剤の開発、技術発展について振り返る

【ドーピング規定の禁止表国際基準と作用、副作用】

現在、スポーツにおけるドーピング行為はすべての種目において存在する。それを規制するためドーピング規定の禁止表国際基準として、WADA が世界ドーピング防止規定に順ずる 2011 年禁止表国際基準を発表している。今章は現在の基準や作用、副作用についてまとめていく。

【自転車競技におけるドーピング】

歴史の通り、自転車界におけるドーピングの使用問題は深刻で、近年においてそれは無視できない状況にある。昨年度の WADA の調査結果によると、調査検体数が 21835 体、その内、陽性反応、非定形的な反応が出た検体が 724 体になる。この数字は他の種目と比べても多い数となっており、次に多いサッカーでも、調査検体数は 32526 体、陽性反応、非定形的な反応が出た検体数は 569 体と自転車が一

つ抜けているのが分かる。(2009 年度 WADA 調べオリンピックのスポーツ試料分析)そして自転車の検体のそのほとんどがロードレースからのものである。

なぜここまでドーピング行為をするのか、何が選手たちにドーピングをさせているのか。その理由として、勝利至上主義や商業主義の介入更には科学発達の競争が背景としてある。自転車界においては商業主義の介入と、その中における物質主義の過激化があげられるを様々な部分から追及していく。

【今後ロードレースがドーピングと縁を切るには】

ここまでドーピングとロードレースについて書いてきたが、今後このロードレース界において、今すぐにでもこれらを変えて行かなくてはならない転換期に来ている。このドーピングの象徴であるという意識を払拭するためには、報道もさることながら、ロードレース界を統括する連盟である UCI とその他大会を統括するグランツール主催団体の考え方やあり方を変えて行かなくてはならず、今後、お互いの歩み寄りが必要になる。

それと並んで必要なのが、UCI で独自に進んでいるバイオロジカルパスポートで、これは選手個人の血液、尿のプロフィールを記憶していくもので、これによりドーピング検査を正確に行えるもので、トップ選手にのみ普及している。これを、全体に普及させる必要がある。

そしてスポンサーのアンチドーピング方針作成の義務化である、これを行うことにより、近代における商業主義の自転車界への介入を逆手にとってドーピング鎮静化に向かうことが出来、監督など個人の意識を変えていくことが出来ると考える。考察を踏まえロードレースは今後どうして行くべきかを提案する